

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02470

研究課題名(和文) 即興演劇の思想に見られる「エネルギー」概念を指針とする教育者の省察手法の開発

研究課題名(英文) Methodology of Reflection for Educators Guided by the Concept of Energy in the Philosophy of Improvisational Theater

研究代表者

井谷 信彦 (ITANI, Nobuhiko)

武庫川女子大学・教育学部・准教授

研究者番号：10508427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、日常的教育言説や、哲学・教育思想、演劇教育理論などに見られるエネルギー概念の意味と射程を明らかにすることで、この概念を指針とする省察の手法をデザインするための礎石を築いた点にある。主な調査対象は、教育相談や学習支援などに関わる教育言説、デューイ、フロイト、シュタイナー、バタイユらの哲学・教育思想、スポーリンの演劇教育理論などである。この成果は『教育学研究』第88巻をはじめ複数の学術誌にて公開されている。なお3年間続いたコロナ禍の影響により、当初予定されていたワークショップ実践にもとづく省察手法の開発は、残念ながら実施を断念せざるをえなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の学術的意義は次の3つに大別される。日常的教育言説におけるこの概念の意味と射程を明らかにしたこと。自然科学と哲学、心理学、教育学のあいだのエネルギー概念の結節点を明らかにしたこと。演劇教育の実践/理論におけるこの概念の意味と射程を明らかにしたこと。またこれらの成果の社会的意義は、自然科学や、哲学・教育思想、演劇教育理論などに見られるエネルギーという言葉の語義と用例を検証することによって、現在日常的教育言説のなかでもちいられているエネルギー概念の意味と射程を問い改めることで、この概念を指針とする省察の手法をデザインするための礎石を築いた点にある。

研究成果の概要(英文)：This study has investigated the essence of the concept of energy in education. It has examined the concept of energy in (1) contemporary educational discourses, (2) Dewey's philosophy of education, Steiner's educational thoughts, Freud's theory of psychoanalysis, and Bataille's philosophy of economy, and (3) Spolin's theory of theatrical education. The results of this study clarify (1) the meaning and significance of the concept of energy in the context of everyday educational discourses, (2) the relationship between the concept of energy in natural sciences and ones in philosophy, psychology, economics, and education, and (3) the meaning and significance of the concept of energy in the context of theatrical education through improvisation. They thus provide the conceptual foundation for developing the method of reflection guided by the concept of energy. Unfortunately, however, workshops for developing the method of reflection could not be held due to the impact of Covid-19 pandemic.

研究分野：臨床教育学、教育哲学、教育思想

キーワード：エネルギー 教育思想 演劇教育 デューイ フロイト シュタイナー バタイユ

1. 研究開始当初の背景

教育者の即興の技量の重要性に関しては、ヘルバルトによるタクト論以来、多くの論者によって指摘されてきた。近年のおもな論考としては、例えばソーヤー〔Sawyer, 2004〕が教育者を即興演劇の役者に喩え、創造性豊かな教授の重要性を説いている。また、子どもの発達を即興演劇になぞらえて捉えることで、他者との協働を軸とした新たな発達概念を提唱している、ホルツマン〔Holzman, 2009〕の議論も重要である。加えて、このように捉え直された発達の概念を教育者の学びに転用することで、新たな教師教育の理論と実践を展開している、ロブマン〔Lobman, 2011〕のような論者もいる。教育者の即興の技量を高めるために省察が重要な役割を果たすことは、ヴァン＝マーネン〔van Manen, 1990 & 1991〕をはじめ複数の論者によって明らかにされてきた。省察を深めるために役立つ手法についても、コルトハーゲン〔Korthagen et al., 2001〕の ALACT モデルを筆頭として、さまざまなモデルが提案されている。日本においてもこれらの成果に示唆を得ながら、教育者の即興の技量を育成するための省察の特徴や意義について、村井尚子〔2000 & 2015〕や井谷信彦〔2013 & 2015〕が明らかにしている。加えて近年、教育者の省察に関する実践報告や、概説書、指南書が毎年のように刊行されている。他に本研究と関連の深い取り組みとして、演劇の手法と対話を主とする授業検討会に関する、渡辺貴裕らによる実践・研究〔基盤研究 C 17K04532〕がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教育者の即興の技量 (tact: 機知・機転) の育成のために取り込まれる省察 (reflection: 体験の振り返り) の手法の開発の一環として、即興演劇の理論・実演において重視される「エネルギー」の概念に注目することによって、即興という現象の特質にかなった、体験の省察を深めるために有効な指針を開発することにある。

3. 研究の方法

上記の課題は次の3つの小課題に取り組むことによって遂行される予定であった。小課題 1: 即興演劇におけるエネルギー概念の意味や用法などを明らかにすること。小課題 2: 即興演劇におけるエネルギー概念を指針とする省察手法を実施・検証すること。小課題 3: 即興演劇におけるエネルギー概念を指針とする省察手法を改善すること。小課題 1 に関しては、すでに申請者が取り組みを進めていた即興演劇の理論に関する文献調査に加えて、即興演劇の専門家などへのインタビュー調査を実施する予定であった。これらの調査結果を照らしあわせることで、即興演劇におけるエネルギー概念の意味と用法を解明すると共に、これを教育実践へと架橋するために求められる配慮・工夫を明らかにすることを予定していた。小課題 2 に関しては、即興演劇の専門家などを講師とする教育者向けのワークショップ(体験型研修)を開催したうえで、講師および受講者へのアンケート調査やインタビュー調査を実施する予定であった。だが、3年間続いたコロナ禍の影響により、このワークショップ実践にもとづく省察手法の開発は、残念ながら実施を断念せざるをえなかった。このため小課題 3 の射程を広げ、即興演劇の理論だけでなく、日常の教育言説や、哲学・教育思想に見られるエネルギー概念についても文献調査を行うことにより、この概念を指針とする省察の手法を開発するための基礎研究に重点を置いた。

4. 研究成果

成果の概要

本研究の成果は、A. 日常の教育言説や、B. 哲学・教育思想、C. 演劇教育理論などに見られるエネルギー概念の意味と射程を明らかにすることで、この概念を指針とする省察の手法をデザインするための礎石を築いた点にある。主な調査対象は、A. 教育相談や学習支援などに関わる教育言説、B. デューイ、フロイト、シュタイナー、バタイユらの哲学・教育思想、C. スポーリンの演劇教育理論などである。この成果は『教育学研究』第88巻をはじめ複数の学術誌にて公開されている。なお3年間続いたコロナ禍の影響により、当初予定されていたワークショップ実践にもとづく省察手法の開発は、残念ながら実施を断念せざるをえなかった。

各年度の詳細

【2020年度】演劇をはじめとする舞台芸術や即興パフォーマンスの実演家/思想家の著作、および即興演劇やインプロゲーム等の手法を用いた教育の実践/理論に関する著作を中心に文献調査をおこない、これらの領域におけるエネルギー概念の意味と射程を明らかにした。これにより特に、演劇をはじめとする舞台芸術や即興パフォーマンスにおいても、即興演劇やインプロゲーム等の手法を用いた教育の実践/理論のなかでも、エネルギーが重要な現象の1つとして論及されていること、特に、演劇教育家ヴァイオラ・スポーリンによる著作のなかでは、エネルギーと呼ばれる現象が、課題の解決、コンタクト、インスピレーション、怖れと抵抗、指導者の診断、スポンタネイティ、個人の自由など、彼女の実践/理論の核心を占める諸現象と密接に関わる、重要な現象として捉えられていること、スポーリンによるエネルギー概念の規定とこの現象をめぐる洞察が、即興演劇やインプロゲーム等の手法を用いた教育実践の分析・省察にとって、重要な視点を示唆するものであることが明らかにされた。

【2021 年度】当初計画において当該年度は、(1)エネルギー概念の意味と用法の解明、(2)この概念を教育実践に架橋するための知見の創出、(3)省察ワークショップの実施と分析を、おもな課題としていた。(1)および(2)に関しては、 スポーリンのエネルギー概念の分析をとおして、即興、演劇、教育の三者とエネルギー現象の密接な関連と、即興表現を基調とする教育実践への重要な示唆を明らかにした論稿、 デューイの思想の中心概念である経験がエネルギー現象を媒介とするものであることを解明したうえで、プラグマティズム哲学と教育人間学との新たな対話の可能性を示した論稿、 教育を主題とするゼロ年代の雑誌記事におけるエネルギー概念の意味と用法を精査することで、日常の教育言説にみるエネルギー概念の核となる4つの意味内実を明らかにした論稿の、3つを刊行したことが当該年度の主たる成果である。加えて、これらの知見に基づいてさらにエネルギー概念の内実と射程についての調査・論考を発展させるべく、2021年11月に「エネルギーの教育思想史研究会」を立ち上げ、以後各月の例会をとおして、アリストテレス、バタイユ、フロイト、シュタイナーらの哲学・思想におけるエネルギー概念の来歴と含意を精査してきたことも、重要な進展であった。(3)については、依然コロナ禍により対面ワークショップの実施が困難な状況であったが、オープンダイアログを主題とする遠隔ワークショップの場を設け、エネルギー概念を指針とした省察の手法の開発を進めてきた。対面ワークショップとは異なり自他のエネルギーを実感することの困難な環境ではあるが、交流分析の手法であるエゴグラムを再構築することで開発してきたエネグラムは、対話をめぐる視覚的・協働的な省察のツールとして受講者からも好評を得た。

【2022 年度】当該年度の研究実績は次の2つに大別することができる。 アメリカの演劇教育家スポーリンの実践/理論の起源をたずねる探求の一環として、ロシア/ソビエトの演出家スタニスラフスキーの演劇理論との関係を明らかにしたこと。 教育思想や日常の教育言説にみられるエネルギー概念の意味と射程に関する探求の一環として、19世紀以降の自然科学や人文・社会科学に見られるこの言葉の語義や用例を明らかにしたこと。 はスポーリンの演劇教育思想とスタニスラフスキーの演劇理論との類似と相違を詳細に検証したものであり、この検証のなかで役者同士や役者 観客のエネルギーの交流という両者に共通の理念が明らかにされた。

は19世紀の自然科学におけるエネルギー理論の発展をふまえて、フロイトの精神分析理論、シュタイナーの教育思想、バタイユの経済理論などにみられるエネルギー概念の意味と射程を検証したものであり、これにより自然科学と人文・社会科学のあいだのエネルギー概念の結節点が詳らかにされた。教育哲学、演劇教育思想、精神分析学、経済理論などにみられるエネルギーという言葉の語義と用例を詳細に検証することによって、現在日常の教育言説のなかでもちいられているエネルギー概念の意味と射程を問い改めることで、この概念を指針とする省察の方法をデザインするための礎石を築いた点に、これらの実績の最も重要な意義がある。なお3年間続いたコロナ禍の影響によって、ワークショップ実践にもとづく省察手法の開発はオンラインに場を移していたが、遠隔で有意義な実践を継続することや有効な調査を行うことには限界があり、残念ながら実施を断念せざるをえなかった。

成果の公表

以上の研究成果は、日本教育学会や教育思想史学会などの専門学会において報告の機会を得られたほか、『教育学研究』第88巻2号、『近代教育フォーラム』第30号、『Educational Studies in Japan』vol.17をはじめ、複数の学術誌にて公開されている。(別表参照)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 井谷信彦	4. 巻 88
2. 論文標題 ヴァイオラ・スポーリンの演劇教育思想にみるエネルギー概念の内実と射程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 184-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.88.2_184	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井谷信彦	4. 巻 7
2. 論文標題 ゼロ年代日本の教育言説にみるエネルギー概念の用法と意味	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井谷信彦	4. 巻 30
2. 論文標題 『民主主義と教育』にみるエネルギー概念：経験の媒体	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 108-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井谷信彦	4. 巻 79
2. 論文標題 Viola Spolin の演劇教育思想にみるエネルギー概念の特徴	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育学会大会研究発表要項	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/taikaip.79.0_3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nobuhiko Itani	4. 巻 17
2. 論文標題 Theater Games and Stanislavski 's System: A Study on the Origins of Viola Spolin 's Theatrical Education	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Educational Studies in Japan: International Yearbook	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井谷信彦、森亘、後藤悠帆、広瀬綾子、今井康雄	4. 巻 32
2. 論文標題 エネルギーの教育思想史序説 フロイト、シュタイナー、バタイユを事例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 井谷信彦
2. 発表標題 Viola Spolin の演劇教育思想にみるエネルギー概念の特徴
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井谷信彦、森亘、後藤悠帆、広瀬綾子、今井康雄
2. 発表標題 エネルギーの教育思想史序説 フロイト、シュタイナー、バタイユを事例として
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井谷信彦
2. 発表標題 ポールドウィン『哲学・心理学辞典』にみるエネルギー概念
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------